

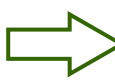



先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/07/04

## タカ派化する中銀

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>		<b>円安・ユーロ高のツインエンジン</b> 予想レンジ: 125.100~132.000円	2-3
<a href="#">ユーロ/ドル</a>		<b>日足・週足で三役好転が点灯</b> 予想レンジ: 1.11000~1.16200ドル	4-5
<a href="#">ポンド/円</a>		<b>早期利上げ期待はやや行き過ぎか</b> 予想レンジ: 142.500~149.500円	6-7
<a href="#">ポンド/ドル</a>		<b>BOE要人発言でスタンス再確認</b> 予想レンジ: 1.26500~1.31000ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2017 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

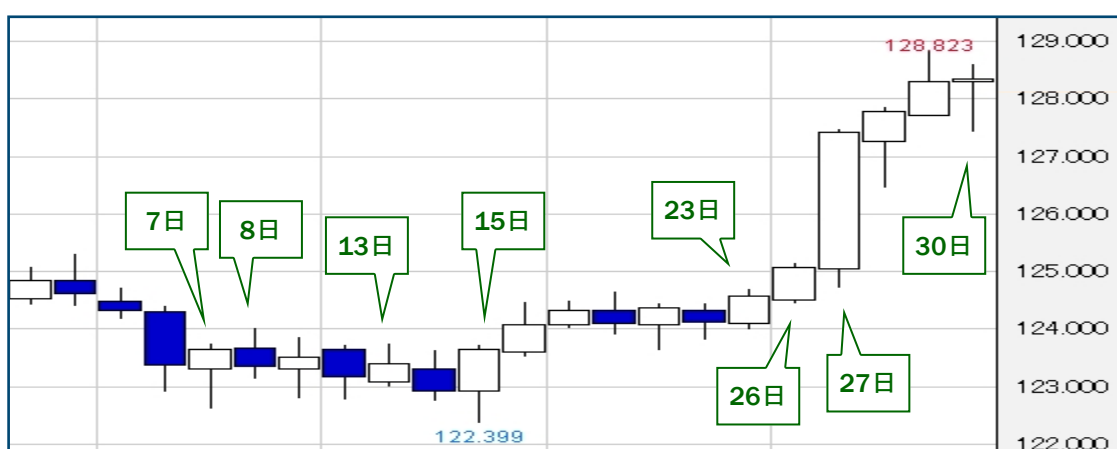
## ユーロ/円 6月の推移

# EUR/JPY

6月のユーロ/円相場は122.399～128.823円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.1%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

欧州中銀(ECB)の緩和縮小観測が浮上するも、8日の理事会でのドラギ総裁の会見内容がハト派的と受け止められた事などから、ユーロ/円はじり安で推移。日銀の緩和縮小観測が浮上した事も重石となり、15日に122.399円まで下落した。

しかし、16日に日銀が金融政策の現状維持を発表する中、27日にドラギ総裁が「デフレ圧力はリフレに変わった」などと発言した事をきっかけにユーロ圏の緩和縮小観測が再浮上したことで、金融政策の方向性の違いが浮き彫りとなり、徐々に円売りが進行。29日に約1カ月半ぶり高値となる128.823円まで一段高となった。



### 四本値

OPEN	124.532
HIGH	128.823
LOW	122.399
CLOSE	128.362

7日	「ECBは草案として2019年までのインフレ見通しを下方修正」とのECB関係者の話が伝わるとユーロが下落。しかし「ECBは成長見通しを引き上げるほか、インフレ見通しを若干引き下げる」「3月に示した見通しの全面的な見直しではなく、むしろ調整になる」などとする別のECB関係者の発言が伝わると、一転してユーロを買い戻す動きが強まった。
8日	「日銀が異次元緩和の出口を巡る議論について、『時期尚早』としていた姿勢を改め、市場との対話を重視する方向に修正しつつある」との一部報道を受けて円買いが強まる中、ユーロ/円は一時123.10円台まで下落した。その後、ECBは理事会で、政策金利の据え置きを決定。政策金利の先行きを「当面の間、現状水準に留まる」とし、従来の「現状かそれ以下の水準」から変更したため、一時ユーロ買いが強まった。ただ、ドラギ総裁が「経済成長は予想よりも早く拡大している」「量的緩和(QE)の先行きについていつ発表すべきか議論しなかった」などと発言。公表されたECBスタッフの経済予想では、経済成長率見通しは3月時点より引き上げたが、インフレ率見通しは引き下げられた。これを受けてユーロは当初は売買が交錯するも、次第に売りが優勢となった。
13日	独6月ZEW景気期待指数が18.6と予想(21.7)を下回った事から、ユーロは弱含んだ。なお、ユーロ圏6月ZEW景気期待指数は37.7(前月:35.1)であった。
15日	ユーロ圏財務相と国際通貨基金(IMF)は、85億ユーロのギリシャ向け融資実施で合意した。
23日	独6月製造業PMI・速報値が59.3、ユーロ圏6月製造業PMI・速報値も57.3と、いずれも予想(59.0、56.8)を上回った。
26日	独6月IFO景況感指数は115.1と、市場予想(114.5)に反して前回(114.6)から上昇し、統計開始以来の最高を記録した。
27日	ドラギECB総裁が「すべての兆候はユーロ圏の景気回復の強まりと広がりを見せている。デフレ圧力はリフレに変わった」などと発言。タカ派的な内容を受けて欧州債利回りが上昇すると共にユーロ買いが強まった。
30日	ユーロ圏6月消費者物価指数・速報値が前年比+1.3%と予想(+1.2%)を上回るも、前月(+1.4%)と比べ伸びが鈍化。欧州勢がユーロ売りで参入していた事もあり、ユーロ/円は127.40円台まで値を下げた。しかし、その後は良好な米経済指標を受けてNYダウ平均が堅調に推移した事から、128.60円付近まで切り返した。

# EUR/JPY

## 日 経 平 均

OPEN	19692.16
HIGH	20318.11
LOW	19686.32
CLOSE	20033.43

## 独 D A X

OPEN	12623.61
HIGH	12951.54
LOW	12319.00
CLOSE	12325.12

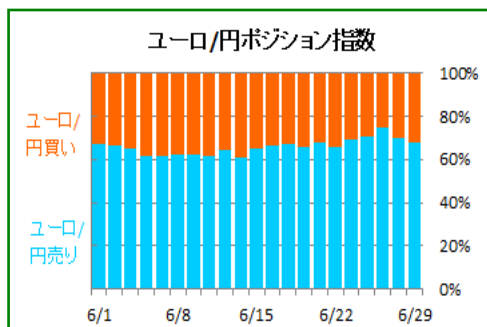
## 独2年債利回

OPEN	-0.719%
HIGH	-0.547%
LOW	-0.744%
CLOSE	-0.572%

## 独10年債利回

OPEN	0.311%
HIGH	0.480%
LOW	0.225%
CLOSE	0.466%

## 6月のポジション動向



## 7月のユーロ圏の注目イベント

- ・5月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・7月独消費者物価指数・速報値 (28日)
- ・EU財務相理事会(11日、24日)
- ・7月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(18日)
- ・7月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)
- ・ECB理事会(20日)
- ・7月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(24日)
- ・7月独Ifo景況感指数(25日)

## 7月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

6月は「緩和継続の円」に対し、「緩和縮小が見えてきたユーロ」と、金融政策の方向性の違いがユーロ/円上昇の原動力となった。こうした流れは突発的なリスクイベントが発生しない限り容易には変わりにくく、ECBの緩和縮小観測が浮上する場面では引き続きユーロが買われやすいと見る。

現在実施しているECBの金融緩和策が今年12月で期限が切れるのを前に、9月のECB理事会で緩和縮小手順について発表すると見ている市場関係者が多い。このため、今月20日の理事会については金融政策の現状維持がコンセンサスとなっており、波乱は少ないと見るが、もし今後の金融政策について言及があれば、予想外の出来事を受けてユーロが急騰する事もあり得る。念のため注意したい。

テクニカル面では、一目均衡表を見ると日足・週足で三役好転が点灯しており、相場は上昇トレンドの中にあることを示している。2014年12月高値(149.760円)～2016年6月安値(109.197円)の1/2戻し(129.480円)を突破すると、61.8%戻し(134.265円)まで主だった目処が見当たらないため、130円ちょうど等の心理的節目を試す事となるだろう。(川畑)

(予想レンジ: 125.100～132.000円)

# ユーロ/ドル 6月の推移

# EUR/USD

6月のユーロ/ドル相場は1.11188～1.14452ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.6%の上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

一部で早期緩和縮小に向けてタカ派的な声明が予想されていた中、8日の欧州中銀(ECB)理事会後のドラギ総裁会見はどちらかといえばハト派の内容であった。一方、米国は14日に利上げ発表後も年内の追加利上げを示唆するも、市場では懐疑的な見方が強かったことから、方向感が定まらなかった。

しかし、27日にドラギ総裁が「デフレ圧力はリフレに変わった」などと発言した事をきっかけにユーロ圏の緩和縮小観測が再浮上した事でユーロ買いが活発化すると、29日に昨年5月以来の高値となる1.14452ドルまで一段高となった。



四本値	
OPEN	1.12455
HIGH	1.14452
LOW	1.11188
CLOSE	1.14186

7日	「ECBは草案として2019年までのインフレ見通しを下方修正」とのECB関係者の話が伝わるとユーロが下落。しかし、その後「ECBは成長見通しを引き上げるほか、インフレ見通しを若干引き下げる」「3月に示した見通しの全面的な見直しではなく、むしろ調整になる」などとする別のECB関係者の発言が伝わると、一転してユーロを買い戻す動きが強まった。
8日	ECBは理事会で、政策金利の据え置きを決定。政策金利の先行きを「当面の間、現状水準に留まる」とし、従来の「現状かそれ以下の水準」から変更したため、一時ユーロ買いが強まった。ただ、ドラギ総裁が「経済成長は予想よりも早く拡大している」「量的緩和(QE)の先行きについていつ発表すべきか議論しなかった」などと発言。公表されたECBスタッフの経済予想では、経済成長率見通しは3月時点より引き上げたが、インフレ率見通しは引き下げられた。これらを受けてユーロは当初は売買が交錯するも、次第に売りが優勢となった。
13日	独6月ZEW景気期待指数が18.6と予想(21.7)を下回った事から、ユーロは弱含んだ。なお、ユーロ圏6月ZEW景気期待指数は37.7(前月:35.1)であった。
15日	良好な米経済指標が複数発表された事からドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは一時1.1130ドル台まで下落した。なお、ユーロ圏財務相と国際通貨基金(IMF)は、85億ユーロのギリシャ向け融資実施で合意した。
23日	独6月製造業PMI・速報が59.3、ユーロ圏6月製造業PMI・速報も57.3と、それぞれ予想(59.0、56.8)を上回った。
26日	独6月IFO景況感指数は115.1と、市場予想(114.5)に反して前回(114.6)から上昇し、統計開始以来の最高を記録した。
27日	ドラギECB総裁が「すべての兆候はユーロ圏の景気回復の強まりと広がりを示している。デフレ圧力はリフレに変わった」などと発言。タカ派的な内容を受けて欧州債利回りが上昇すると共にユーロ買いが強まった。
30日	ユーロ圏6月消費者物価指数・速報値が前年比+1.3%と予想(+1.2%)を上回るも、前月(+1.4%)と比べ伸びが鈍化。欧州勢がユーロ売りで参入していた事もあり、ユーロ/ドルは一時1.1390ドル台まで下落した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/USD

## NYダウ平均

OPEN	21030.55
HIGH	21535.03
LOW	20994.22
CLOSE	21349.63

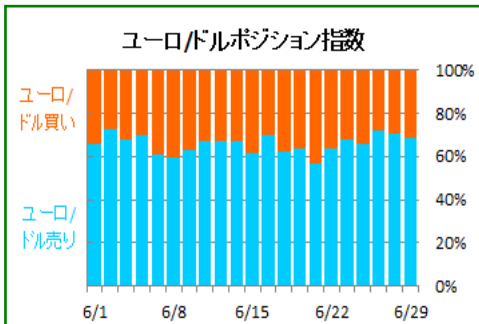
## 独10年債利回

OPEN	0.311%
HIGH	0.480%
LOW	0.225%
CLOSE	0.466%

## 米10年債利回

OPEN	2.2097%
HIGH	2.3072%
LOW	2.1013%
CLOSE	2.3037%

## 6月のポジション動向



## 7月のユーロ圏の注目イベント

- ・5月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・7月独消費者物価指数・速報値(28日)
- ・EU財務相理事会(11日、24日)
- ・7月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(18日)
- ・7月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)
- ・ECB理事会(20日)
- ・7月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(24日)
- ・7月独Ifo景況感指数(25日)

## 7月の見通し

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

現在、ECBは今年12月までの予定で資産買い入れによる緩和策を実施しているが、先月のドラギ総裁発言を受け、年内の緩和縮小観測が強まっている。現在のところ、9月理事会で緩和縮小手順について発表し、来年1月から実施すると見ている市場関係者が多い。今月20日の理事会については金融政策の現状維持がコンセンサスのため波乱は少ないと見るが、もし今後の金融政策について言及があれば、ユーロが急騰する事もあり得る。念のため注意したい。

また、足元で米国の年内利上げ回数が不透明な事も、ユーロの上昇を後押ししている。米金利先物市場では、年内に少なくとも1回の利上げ(0.25%)が行われる確率は5割前後となっている。一段とドル安が進むかは、今月の米6月雇用統計(7日)や、小売売上高や消費者物価指数(いずれも14日)などのデータ次第と言える。弱めの内容が多ければ米追加利上げ期待が後退してドルの下落要因となろう。

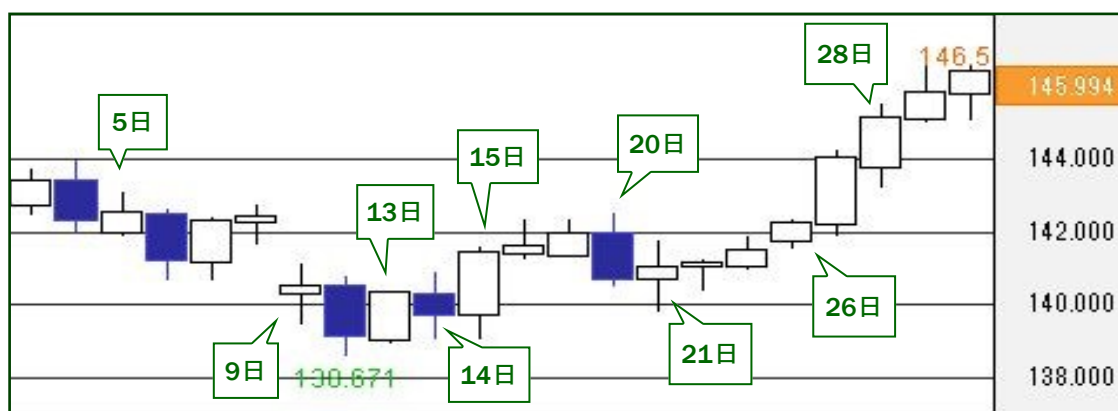
テクニカル面では、一目均衡表を見ると日足・週足共に三役好転が点灯しており、相場は上昇トレンドの中にあることを示している。足元で上値抵抗となっている、2015年8月高値(1.17127ドル)と2016年5月高値(1.16160ドル)を結ぶレジスタンスライン(今週は1.14521ドル)を突破すると、16年5月高値まで上値余地が拡大するだろう。(川畑)

(予想レンジ:1.11000~1.16200ドル)

# GBP/JPY

## ポンド/円 6月の推移

6月のポンド/円相場は138.671～146.541円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.5%の上昇(ポンド高・円安)となった。政権基盤の強化を目論んでメイ英首相が実施した前倒し総選挙が裏目に出ると(与党・保守党は330から318に議席を減らした)ポンド安に振れたが、英中銀(BOE)がポンド安によるインフレ高進を抑制するため、利上げに踏み切る可能性が高まると切り返した。当初は「今は利上げのときではない」としていたカーニーBOE総裁が、「英国経済がフル稼働の状態に近づくにつれ、利上げが必要になる可能性が高い」と述べた事が前言撤回と受け止められポンド高が加速。米国やユーロ圏やカナダでも緩和的な金融政策が正常化に向かうとの観測が強まる中、黒田日銀総裁が「出口論は時期尚早」との姿勢を崩さなかったため、円が独歩安となった事もあって、月末には146.50円台まで上値を伸ばした。



四本値	
OPEN	142.768
HIGH	146.541
LOW	138.671
CLOSE	146.439

5日	前週末3日にロンドン中心部でワゴン車や刃物で歩行者を襲撃するテロ事件が発生した事を受けて、弱含みで取引が始まった。しかし、8日の英総選挙を巡る世論調査で、メイ首相率いる保守党が優位を維持している事が明らかになるとポンド買いが強まった。
9日	前日に行われた英総選挙終了直後の出口調査で、メイ首相率いる与党・保守党が過半数(326議席)を下回る見通しが強まった事を受けて前日終値から3円近く急落して取引が始まった。ただ、その後は「アク抜け感」などから世界的に株価が上昇する中でポンド/円も下げ渋った。
13日	英5月消費者物価指数は前月比+0.3%、前年比+2.9%と、予想(+0.2%、+2.7%)を上回った。また、英5月小売物価指数は前月比+0.4%、前年比+3.7%と、こちらも予想(+0.3%、+3.5%)を上回った。
14日	英5月雇用統計は、失業者数が0.73万人増と前月(2.20万人増)から増加幅が縮小し、失業率は2.3%と横ばいだった。一方、2-4月の週平均賃金は前年比+2.1%に留まり市場予想(+2.4%)を大きく下回った。
15日	BOEはMPCで政策金利の据え置き(0.25%)を決定。議事録で今回の決定が5対3であり、3人は0.50%への利上げを主張した事(これまで利上げを主張していたフォーブス委員に続いて、マクファーティ委員とサンダース委員が加わった)などが明らかとなった。また、今秋にはインフレ率が3%を上回るとの見通しを示したほか、ポンド安が進んだ事で物価高が更に進行する可能性があるとして指摘した。これらを受けて一時ポンド買いが強まった。
20日	カーニーBOE総裁が「インフレ圧力は抑制されており、利上げの時ではない」と発言した事を受けてポンドが急落した。
21日	英ホールデンMPC委員が「年後半に金融刺激策の一部解除を支持」と発言するとポンドが上昇。なお、同委員は前回のMPCで政策金利の据え置きに賛成票を投じており、ハト派メンバーと見られていたためインパクトが大きかった。
26日	メイ首相率いる英与党・保守党は、北アイルランド民主統一党(DUP)の閣外協力を取り付けた。両党で下院の過半数議席を確保する事になり、当面の政権運営にメドが立った事からポンドは下げ渋った。
28日	カーニーBOE総裁が「英国経済がフル稼働の状態に近づくにつれ、利上げが必要になる可能性が高い」とした上で「向こう数カ月以内に利上げを議論することになる」などと述べるとポンドが急伸した。

## GBP/JPY

## 日経平均

OPEN	19692.16
HIGH	20318.11
LOW	19686.32
CLOSE	20033.43

## FTSE100

OPEN	7519.95
HIGH	7598.99
LOW	7302.71
CLOSE	7312.72

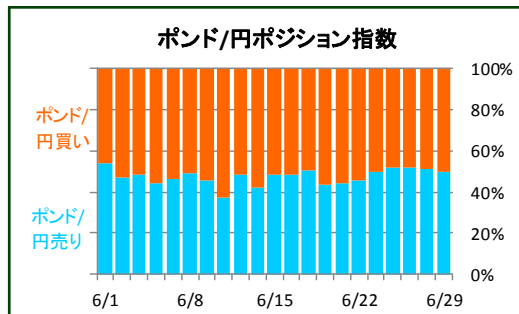
## 英2年債利回

OPEN	0.124%
HIGH	0.397%
LOW	0.067%
CLOSE	0.358%

## 英10年債利回

OPEN	1.046%
HIGH	1.297%
LOW	0.923%
CLOSE	1.257%

## 6月のポジション動向



## 7月の英国の注目材料

- ・6月英製造業PMI(3日)
- ・6月英建設業PMI(4日)
- ・6月英サービス業PMI(5日)
- ・5月英貿易収支(7日)
- ・5月英鉱工業生産(7日)
- ・G20首脳会議(7-8日)
- ・EU財務相理事会(11日)
- ・6月英雇用統計(12日)
- ・6月英消費者物価指数(18日)
- ・6月英小売物価指数(18日)
- ・6月英生産者物価指数(18日)
- ・6月英小売売上高(20日)
- ・EU財務相理事会(24日)
- ・4-6月期英GDP・速報値(26日)

## 7月の見通し

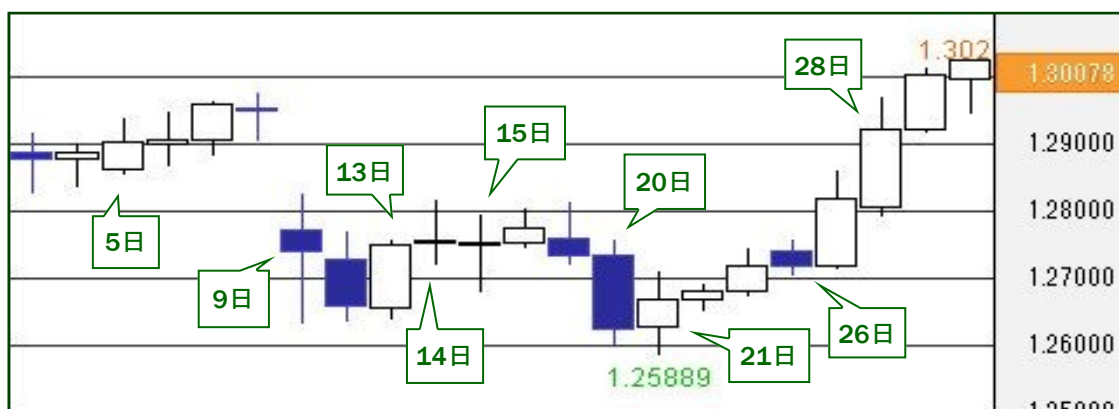
カーニー総裁の発言などによって、英中銀(BOE)の早期利上げ期待が高まっており、足元でポンド相場を押し上げている。先進国の中でインフレ率が最も低く、金融緩和からの出口に距離を置く日銀との「政策温度差」によってポンド/円の上昇に拍車がかかっている。この流れが続けば、英国の欧州連合(EU)離脱決定後の戻り高値でもある148円台前半の強いレジスタンス(抵抗)を試す事になるだろう。ただ、英国の早期利上げについてはやや懐疑的に見ておきたい。カーニー総裁は「利上げが必要になる可能性が高い」と述べたが、これには「英国経済がフル稼働の状態に近づくにつれ」との前置きが付けられている。5月に賃金の上昇率が鈍化し、小売売上高が前月比で減少した点を考慮すれば、英国経済が「フル稼働」に近い状態とは思えない。また、MPCで利上げに票を投じたタカ派のフォーブス委員が6月末で退任(後任はテンレイロ氏)する事などを考慮すれば、利上げ期待のポンド高にはいつ修正が入っても不思議ではない状況だろう。7月はBOEの金融政策委員会(MPC)は予定されていないが、カーニー総裁らBOE高官の発言などから、そのスタンスを再確認したいところだ。(神田)

(予想レンジ: 142.500~149.500円)

# GBP/USD

## ポンド/ドル 6月の推移

6月のポンド/ドル相場は、1.25889～1.30291ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.1%の上昇(ポンド高・ドル安)となった。英総選挙で与党・保守党が敗北(過半数割れ)した事を受けて、欧州連合(EU)との離脱交渉にも悪影響が及ぶとの見方からポンド売りが強まった。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)が今年2回目の利上げを行い、年内にもう1回の利上げとバランスシート縮小を開始する方針を示した事などから、21日には約2カ月ぶりに1.25ドル台へ差し込んだ。しかし、15日の英中銀(BOE)金融政策委員会(MPC)で政策金利の据え置きに賛成したはずのホールデン委員とカーニーBOE総裁が、相次いで利上げに前向きな発言を行った事をきっかけにポンド高が進行。30日には1.30ドル台を回復した。



四本値	
OPEN	1.28907
HIGH	1.30291
LOW	1.25889
CLOSE	1.30282

5日	前週末3日にロンドン中心部でワゴン車や刃物で歩行者を襲撃するテロ事件が発生した事を受けて、弱含みで取引が始まった。しかし、8日の英総選挙を巡る世論調査で、メイ首相率いる保守党が優位を維持している事が明らかになるとポンド買いが強まった。
9日	前日に行われた英総選挙終了直後の出口調査で、メイ首相率いる与党・保守党が過半数(326議席)を下回る見通しが強まった事を受けて前日終値から大きく下落して取引が始まった。その後開票が進み、出口調査のとおり保守党は議席を伸ばせなかったがポンド売りが再燃する事はなかった。
13日	英5月消費者物価指数は前月比+0.3%、前年比+2.9%と、予想(+0.2%、+2.7%)を上回った。また、英5月小売物価指数は前月比+0.4%、前年比+3.7%と、こちらも予想(+0.3%、+3.5%)を上回った。
14日	英5月雇用統計は、失業者数が0.73万人増と前月(2.20万人増)から増加幅が縮小し、失業率は2.3%と横ばいだった。一方、2-4月の週平均賃金は前年比+2.1%に留まり市場予想(+2.4%)を大きく下回った。
15日	BOEはMPCで政策金利の据え置き(0.25%)を決定。議事録で今回の決定が5対3であり、3人は0.50%への利上げを主張した事(これまで利上げを主張していたフォーブス委員に続いて、マクファーティ委員とサンダース委員が加わった)などが明らかとなった。また、今秋にはインフレ率が3%を上回るとの見通しを示したほか、ポンド安が進んだ事で物価高が更に進行する可能性があるとの指摘した。これらを受けて一時ポンド買いが強まった。
20日	カーニーBOE総裁が「インフレ圧力は抑制されており、利上げの時ではない」と発言した事を受けてポンドが急落した。
21日	英ホールデンMPC委員が「年後半に金融刺激策の一部解除を支持」と発言するとポンドが上昇。なお、同委員は前回のMPCで政策金利の据え置きに賛成票を投じており、ハト派メンバーと見られていたためインパクトが大きかった。
26日	メイ首相率いる英与党・保守党は、北アイルランド民主統一党(DUP)の閣外協力を取り付けた。両党で下院の過半数議席を確保する事になり、当面の政権運営にメドが立った事からポンドは下げ渋った。
28日	カーニーBOE総裁が「英国経済がフル稼働の状態に近づくにつれ、利上げが必要になる可能性が高い」とした上で「向こう数カ月以内に利上げを議論することになる」などと述べるとポンドが急伸した



## GBP/USD

## NYダウ平均

OPEN	21030.55
HIGH	21535.03
LOW	20994.22
CLOSE	21349.63

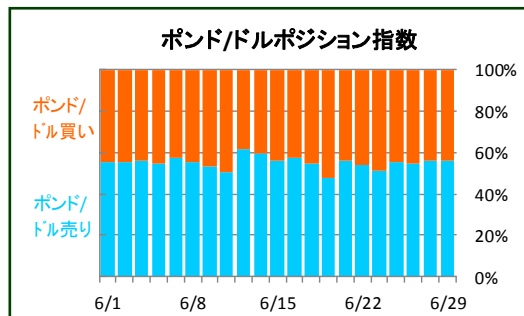
## 米10年債利回

OPEN	2.2097%
HIGH	2.3072%
LOW	2.1013%
CLOSE	2.3037%

## 英10年債利回

OPEN	1.046%
HIGH	1.297%
LOW	0.923%
CLOSE	1.257%

## 6月のポジション動向



## 7月の英国の注目材料

- ・6月英製造業PMI(3日)
- ・6月英建設業PMI(4日)
- ・6月英サービス業PMI(5日)
- ・5月英貿易収支(7日)
- ・5月英鉱工業生産(7日)
- ・G20首脳会議(7-8日)
- ・EU財務相理事会(11日)
- ・6月英雇用統計(12日)
- ・6月英消費者物価指数(18日)
- ・6月英小売物価指数(18日)
- ・6月英生産者物価指数(18日)
- ・6月英小売売上高(20日)
- ・EU財務相理事会(24日)
- ・4-6月期英GDP・速報値(26日)

## 7月の見通し

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

6月下旬に進んだポンド高・円安は、英中銀(BOE)の早期利上げ期待が原動力となった。中でも市場は、28日のカーニー総裁の発言を「宗旨替え」と受け止めたようで、ポンド/ドル相場はこの発言によって英総選挙で開けた日足チャート上(8-9日)の下窓を埋めた。たしかにカーニー総裁は20日に「利上げの時ではない」と発言してからわずか8日後に「向こう数カ月以内に利上げを議論することになる」と述べており、利上げ支持に心変わりしたように見える。ただ、カーニー総裁の朝令暮改的な発言は今に始まった事ではない。良く言えば「柔軟」、悪く言えば「ブレやすい」のがカーニー発言の特徴であり、今回のタカ派発言についても「英国経済がフル稼働の状態に近づくにつれ」という前置きがある事から、あまり重視すべきではないように思われる。足元で英労働者の賃金が伸び悩んでいる点を考慮すれば、無理な利上げが英経済を失速させてしまうリスクを孕む事は明白だろう。今回のタカ派発言の裏には、インフレ高進を招きかねないユーロに対するポンド安の進行を遅らせる狙いもあったのではないだろうか。欧州連合(EU)との離脱交渉で難航が予想される事や、米経済が底堅くドルが一方的に下落する展開を見込みにくい事などから、利上げ期待によるポンド高には限界があるだろう。(神田)

(予想レンジ: 1.26500-1.31000ドル)